関西自然保護機構会報

No. 1

目　　次

関西自然保護機構の発足にあたって……四手井　綱　英

論　説

琵琶湖集水域の自然と自然保護……吉　良　竜　夫……1

社寺林の研究にあたって……菅　沼　孝　之……7

資　料

近畿の自然保護団体名簿……11

随　想

海べの鳴く虫……日　浦　　勇……16

新刊紹介……16

定　款……18

会務報告……20

1978 年 10 月

関 西 自 然 保 護 機 構

関西自然保護機構の発足にあたって

会　長　四手井綱英

小氷河期の再来近しなどと言われ出してから，もう何年かたった。数日前の新聞では名大の樋口君がヒマラヤの氷河調査の成果として同地域の氷河は寒冷化とは逆行して，多くは後退現象を示していると発表したと報じている。何れにしても，最近の気候が異状であることに変りなさそうである。

今夏はたしかに暑かった。 各地で最高気温の記録が更新されたり，30°Cを越す日数が著しく長いとか，熱帯夜の連続日数が新記録を出したとか，70歳に手がとどきそうになった私にとっても，つらい日々が続いた。暦上の立秋は酷暑日で，これを過ぎても到底残暑などとはおせじにも言えそうにない。

一方不況と円高は政府の環境行政の後退を誘発したらしく，環境保護諸法の発足当時の勇しい進軍ラッパは音たえて久しい。どれをとって見てもはらだたしくなる此の頃であろう。

関西自然保護機構（ＫＯＮＣ）が発足してなお日は浅く，当初の目標の社団法人としての認可は環境庁の係り官にたずねると，なかなかの困難があるらしいことが分かった。このことは慎重に進める必要はあるが，とも角本機構を発足させた主目的が，自然環境の保全に関係の深い研究者の間の学際的な研究，討論の機会を可能にし，相互の意志のそ通をはかること，さらに重要な自然環境の保全について，共同研究を行ない，具体的な保護対策を確立するばかりでなく，多くの自然破壊に対しても，基礎的理論を確立しようとするにあったことから，会員相互の連けいを密にする必要がある。そこで機関紙としてささやかではあるが会報が発刊されることになった。

本報が今後会員の自由な発言の場として，広く活用されるよう希望したい。

なお本部からのおしらせは，KONC News として別に発行されている。

ニュースで御承知のことと思うが，今まで集まった基金や会費はなお充分ではないが，研究助成金の交付先も決まり，セミナーも開かれ，調査研究事業として，二次林班，社寺林班，自然破壊の現況調査班の３班が発足している。

今後会員諸氏の御努力により，会員の増加がはかられることもあわせて希望したい。

立秋の日に